

【前編】“コドモテラス”が創る笑顔溢れる子どもの居場所



こんにちは！コレクティブふくおか+事務局です。

コレクティブふくおか+の「子どもの居場所」チームが、社会課題の解決に向けて取り組んでいる NPO 法人コドモテラス運営委員会の現場へ伺い、インタビューした記事を、前編・後編にまとめてくれました。ぜひ、ご一読ください。

皆さんは“子どもの居場所”と聞いて何をイメージしますか？

子どもの居場所とは、子どもが一人でも安心して利用することができ、自分の存在を受け入れてくれる場所で、子どもにとって、とても重要な役割を果たしています。

そんな我々の暮らしに欠かせない“子どもの居場所”づくりをしている団体が福岡にもあります。

その中でも、今回は NPO 法人コドモテラス運営委員会（以下：コドモテラス）代表の大野さんにお話を伺ってきました。主に大学生が主体となって、スポーツ大会やゲーム大会、人権学習や子ども食堂等、幅広くイベントを開催されています。

リンク先

<https://www.kodomoterasu.org/>

今回、金山公民館で開催されたクリスマス会に私たちも参加してきました。このクリスマス会は、コドモテラスが、金山公民館主催の『子どもの居場所』に講師としてイベントの企画運営を委託され、行ったイベントで、自己紹介ビンゴゲーム、クリスマスリースづくり、サンタからのお菓子プレゼントなど子どもたちが楽しめる内容が盛りだくさんでした。金山公民館に隣接している金山小学校の体育館も借りて身体を動かして遊べるイベントもありました。



子どもたちから「肉まん先生」という愛称で呼ばれる大野さんが運営するコドモテラス。それは、どのような居場所なのでしょう！？
ぜひご覧ください！

学生の頃の大野さんが子どもの居場所づくりに足を踏み入れたわけは？

2018年9月、当時大学3年生であった大野さんは、城南区の鳥飼公民館で子ども食堂を企画・運営しました。これが大野さんにとって初めての子どもの居場所づくりでした。その少し前に、大学のゼミの先生に連れられ、活動が盛んだった大野城市の子ども食堂に参加し、その際、先生に「うちの大学でも子ども食堂できそうじゃない？」と言われたことが、鳥飼公民館で子ども食堂をすることになったきっかけだったそうです。



現在は子どもの居場所づくりに対して熱い想いをもち活動されている大野さんですが、一番最初は子ども食堂には全く興味がなく、自分でやろうと思っていなかったそうです。

では、なぜそんな大野さんが子どもの居場所づくりを始めようと思ったのでしょうか？

大野さん：一番最初の鳥飼公民館で開催した子ども食堂は、自分からというよりは、大学の先生から言われたからするという感じで開催したのですが、実際にやってみたら面白いし、勉強していけば尚更必要なんだなというのも分かりました。そして、子どもたちも「またしてほしい」「次はいつやんの？」と言ってくれたので、子ども食堂が終わった後の反省会で、スタッフとして参加してくれた学生に、これからどうしていくかを相談して、今後も活動を続けていくことになりました。

活動に参加したことで、子ども食堂の面白さや必要性を実感し、更に子どもたちの思いも受け取った大野さんは活動の継続を決意。それから任意団体としてコードモテラスNteria 運営委員会を発足し居場所づくりを始めました。最初は、エフコープやフードバンク、NPO 法人チャイルドケアセンターに協力を頼み、食材やお菓子の提供をさせていただいて運営していたそうです。

それまでの間、任意団体として活動していた大野さんは、なぜNPO 法人を設立しようと思ったのか。その理由についておうかがいしました。

大野さん：僕は2020年の4月から保育士をしていたのですが、仕事上の都合で、数か月で保育士を辞めました。現在は別の企業に勤めているのですが、保育士を辞めた時は次の仕事なども決まっていませんでした。その時に、ちゃんと自分の団体を持ちたいし、子どもと関わることは絶対ずっと続けたいなと思ったので、NPO法人にしようと思いました。また、任意団体ではなくNPO法人として活動することで、保護者の方も安心して子どもを預けられるのではないかという考えもあって、NPO法人にしたという感じですね。

NPO法人は一般社団法人とは違い、設立のためには必要な手続きや膨大な書類があるため、相当な時間がかかるそうです。それでも、一般社団法人ではなくNPO法人にすることにこだわった大野さん。その理由についてうかがいました。

大野さん：たくさん書類が必要になってしまうんですが、NPO法人を設立するときには、費用がかからない。あと、NPO法人という法人格が欲しいなと思い、NPO法人コードモテラス運営委員会にしました。

また、鳥飼公民館での子ども食堂の活動を通して、「しっかりとした企画準備と役割分担の徹底」「子どもたちが主役」という大きく2つの気づきがあったそうです。

まず、「しっかりとした企画準備と役割分担の徹底」について話していただきました。

大野さん：企画段階で、いつ、どこで、誰に、何を、どうやってやるのか、というのを考えないと本筋が逸れてしまうことがあります。何のためにやっているのか、どこですのかなど、決めておくべきところはしっかりと決めておかなければ、イベント自体が成り立ちません。また、企画段階で、イベントの開催中に起こりうるアクシデントなどを想定しておくことで、子どもたちのアレルギーや万が一の怪我などに対するリスク管理にも繋がります。

次に、「子どもたちが主役」について話していただきました。

大野さん：子どもたちが主役というのは、僕の中で活動開始時から一番大切にしていることです。子どもの居場所づくりは、1980年頃、不登校が多かったため居場所のない子どもたちのために行っていましたが、今は子どもたち皆が対象になっています。

なんで変わってきたのかというと、共働きの家庭やひとり親の家庭が増えている状況、インターネットやゲームの普及による外遊びの減少などによる、生活・遊び両方の面から子どもたちが自由に過ごしたり、遊ぶことができる環境が少なくなってきたからです。

だからといって、子どもたちは外で遊ぶことが嫌なのかというとはそうではなく、今回のクリスマス会の際にも体育館で走りまわっていたように、本当は身体を動かして遊びたいんですね。

大人が企画して準備したものを子どもと共に実行するという形ではなく、子どもたち自身に来て、これを今日したい！みたいな感じの居場所づくりをしたいなと思っています。運営側が考えて子どもたちに勝手に提供するという形にしてしまうと、子どもが主役ではなく大人が自己満足でやってるだけになるので、そうならないようにしたいなと思っています。



この2つの気づきは、現在のコードモテラスでの活動にとっても活かされているということを私たち自身もクリスマス会に参加してとても感じました。

子どもが主役で学生が主体！

コードモテラスでは、学生主体の運営で、子どもが主役となる居場所づくりを行っています。コードモテラスとはどのような団体ですか？という質問に対する「子どもと学生を育てるような団体ですかね」という大野さんのお話はとても印象的でした。そんなコードモテラスの特徴は大きく2つあります。

コドモテラスの大きな特徴の 1 つである、学生が主体となって運営を行っている居場所というのは全国的にも珍しいです。

一体どのような団体なのでしょう？

大野さん：コドモテラスは、大人じゃなくて学生が主体となって子どもの居場所づくりを企画・運営する団体です。子どもの居場所づくりは子どもが主役なんですけど、それをする時に学生たちも企画・運営の難しさやイベントを行う時の段取り、子どもとの接し方などを、経験を積んで学んでほしいなと思っています。また、僕は教育学部で勉強をしていたのですが、僕が通っていた大学では子どもと関わる機会が 2 年生までなくてずっと座学なので、「ここに何しに来たっやろう？」「大学辞めたい」という状態になってしまう学生もいました。だから、そのような学生に対して子どもたちと遊ぶ機会を僕たちが提供し、一緒に頑張れるような活動も行いたいという思いもあって、学生が主体となった団体を立ち上げたという感じですね。

運営を行っている学生たちは、イベント前にはミーティングで企画の準備を入念に行い、イベント後には反省会をして上手くいかなかった部分の振り返りをしっかりと行っていました。この積み重ねが、次に活かされ、イベントを重ねるたびに企画内容が充実し、イベントの運営や進行がよりスムーズになっていると感じ取ることができました。



また、将来的には、大野さんは支える側で、学生が企画などを行い、主体性を発揮するような仕組みを作っていきたいようでした。

学生主体の運営を行っているコドモテラスだからこそその魅力もあります。

例えば、子どもたちと年齢の近い学生がいるというのがその一つ。お兄ちゃんお姉ちゃんができるような感覚で子どもたちは過ごすことができます。

大野さんは、学校の先生でも保護者でもない第3の大人に、気軽に相談できるような関係性ができることを望んでいるそうです。

また、コドモテラスのもう1つの大きな特徴は、「子どもが主役」の居場所づくりを行っていることです。具体的にどういった居場所づくりがなされているのか、うかがいました。

大野さん：子どもたちが主役になっていると、子どもたちが自分の意志でしたいことを選んで自由に過ごせます。これは僕が今大切に思っていることです。一番最初の鳥飼公民館の時は、好きな時間に好きなところに行って好きなことを選択ができるように、学習スペースと読書スペースとレクリエーションスペースというように場所を区切ってやっていました。初めての自主開催である天神の「福岡市立中央児童会館 あいくる」で行ったイベントでは、工芸室では工作、音楽室ではゲームというように、遊びの内容ごとに部屋を作りました。そうすることで、子どもたちが自由に部屋を移動して遊びを選べるようにしました。自主開催ではなく、公民館から依頼されて開催する場合は、イベント内容の方針をある程度提示される場合もあります。ただ、レクリエーションで選択肢をたくさん用意して子どもたちに選ばせるようにするなど、そこでできるだけ子どもたちが主体的に活動できるようにしたいと思っています。

これをしなさい、今はこの時間です、と制限するのではなく、子どもたちがしたいことができるように様々な工夫がなされているからこそ、子どもたちは大野さんのもとでのびのびと楽しく過ごせるのだらうと感じました。

イベントを決める時には、子どもが主役という軸がある一方で、先生（学生たち）が楽しんでいないと子どもたちも楽しめないという考えから、できるだけ学生たちがやりたいことの中からイベントを企画するということが大事にしているそうです。

私たちが実際にクリスマス会に参加してみて、子どもが主役という意味を理解することができました。学生が企画していた遊びとは別に、子どもたちが希望する遊びがあれば、臨機応変に企画内容を変更していくことで、学生の方も子どもたちも楽しめるような工夫がなされていると感じました。



コドモテラスは、今までに鳥飼公民館と城南公民館、金山公民館、あいくるでイベントを開催しています。その中でも、金山公民館が主な活動拠点となっていて、金山小学校の子どもたちとは約2年ほど関わっているそうです。

金山公民館でのイベントの開催が一番多く、長期的に行っているということもあって、大野さんは子どもたちから「肉まん先生」と呼ばれる程の仲になっており、子どもたちは楽しそうに大野さんと遊んだりしゃべったりしていました。

とても和気あいあいとした雰囲気で行われていますが、子どもたちへの接し方で心掛けていることはどのようなことなのでしょう。

大野さん：やっぱり大人が入って全力で楽しんでも、子ども達も面白くなるから、自分たちも入って一緒にやる方がいいのかなと思います。子どもたちも結局大人を見ているので、楽しみ方の手本になるような感じでやっています。ドッジボールとかも、手加減したらバレるので、やるなら全力で本気で狙って当てにいたり。そこで、はしゃぐところははしゃぐんだよ、静かにしないといけないところはちゃんとせないかんけん、って言って教えるっていうのも、大人として大事だと思っています。

一方で、大野さんはまだ現状に満足できていない部分もあるようです。

大野さん：金山公民館の子たちはどちらかというと積極的な子が多いので、いっぱい来てくれます。逆に今来てくれている子はいいんですけど、どちらかというと来てない子たちを支援したいので、どんどん「あれ面白かったよ」「お前も一緒行こう」って言って、必然的に参加してくれる人数が増えれば、今来てない子たちも支援できるのかなと思います。だから、そうするためにも暇な時間がないようにしたいなと思ってはいるんですけど、意外と運営していると間の時間ができちゃうので、そこをどうにかしたいですね。そして、もっと楽しめるようなイベントをもっと作りたいなと思っています。

《後編へ続く》

【子どもの居場所チーム】とみー（大学院生）・あめ（大学生）

（取材日：2021年12月11日）